岩見沢東高等学校　男子テニス部通信　　２０１４．５．１４．

Ganto Tennis

第４７号

文責：佐々木雄介

１４．６㎝

14.6 ㎝・・・・・どれぐらいの長さだろう？ちなみに、テニスボールの直径は、6.35~6.67 ㎝。えっ、そんなに適当なの？と思うかもしれないが、ルールブック（ITF Rules of tennis）は、約３㎜の誤差を認めている。中を取って 6.5 ㎝として計算すれば、14.6 ㎝はその約 2.25 倍。つまり、テニスボール 2.25 個分ということになる。

14.6 ㎝・・・・・どれぐらいの長さだろう？試しに、このテニス部通信の１行の右から左までが何㎝なのか、定規で測ってみた。この行だと左端の「で」から、右端の「の」までの長さである。するとどうだろう！世界はなんと素敵な偶然に満ち溢(あふ)れていることか。14.6 ㎝だったのだ。あまり嬉しいものだから、ついついこんな通信を書き始めてしまった。

ところで、14.6 ㎝って、いったい何の長さだろう？ネット両端のポールの高さは 106 ㎝。シングルスポールの長さも、当然のことながら 106 ㎝。一方、センターストラップを取り付け、無理やり低くしているネット中央部の高さは 91.4 ㎝。ということは、ネットの両端とセンターの高さの差が 14.6 ㎝。ボール２個半、そしてこのテニス部通信の１行の長さということになるのだ。ホントにそんなに違うのか？でも、間違いない。だって、ルールブックにはそう書いてある。

どうして、こんなことになったのだろう。ソフトテニスみたいに、センターの高さもポールと同じにしなかったことには、何か特別な意味でもあるのだろうか。

１９世紀、イギリスで“テニス”という遊びが始まった頃、お嬢様たちはお城の中庭（coat）で優雅にボールを打ち合っていた。そのプレーは、執事が手でボールを投げ入れる（供給する serve する）ところから始まる。お前たちが、トスを上げてバコーンと打ち込むあのプレーを serve とか service と言うのはそのためである。ちなみに、serve の役目を担っていた執事のことを英語では servant と言う。彼らは、ネットの準備もしなくてはならなかったのだけれど、その頃は、ネットをまっすぐピーンと張る技術なんて無かったんじゃないだろうか。「どんなに頑張って引っ張ったって、真ん中が弛(たる)んじゃうのは仕方ないんだけど、それでもあんまり弛(たる)まないように気をつけようや、でもせいぜいこのぐらいが限界だな」というような慣習の名残が、現在のルールにも残っているんじゃないだろうか。

理由や由来はさておき、幸か不幸か、ネットの中央部は両端よりも 14.6 ㎝、ボール 2.25 個、この通信の１行分低くなっている。もしもこれがピーンと張られたネットだとしたら、テニスという競技はずいぶん違った様相を呈していたに違いない。少なくとも、center theory という言葉の説得力は、今よりずっと艶(つや)消しされていたに違いない。

いいか、よーーく考えてくれ。ネットの両端は、センターよりもボール 2.25 個、このテニス部通信の１行分も高くなっているのだ。それでもお前は、苦し紛れのパッシングショットをストレート（down the line）にカッコよく強打したいというのか？